

表 1: 季節により発量と着量が大きく異なる拠点

拠点	12 月	5 月
中部 G	32%(発)	19%(着)
東北 A	14%(発)	32%(着)
東北 E	27%(発)	1%(着)

発地としていたのに対し、5 月には総着量の方が総発量より多く、また、総着量のうち、19%が同拠点を最終目的地とする荷物であることを示している。このように、物流は季節によっても拠点毎の特性は異なる。

3.3 まとめ

先程のデータを分析すると、各拠点の特性は以下の 3 つに分類できる。

1. 季節を問わず安定して発量が多い拠点
2. 季節を問わず安定して着量が多い拠点
3. 季節により、発量と着量が大きく異なる拠点

1 の拠点は、管轄内に通信販売会社の大型倉庫が存在し、ここから大量の荷物が各地域へ向けて配送される特徴が共通している。着量をはるかに上回る発量がこのような大型倉庫から他の拠点へと送られるため、安定して発量が多い結果となっている。

2 の拠点は、住宅街を管轄とする拠点多いのが特徴である。1 の拠点ような通信販売会社等の大型倉庫から大量の荷物が到着するため、着量が多くなる傾向にある。

図 6 は拠点を地域毎にまとめ、特性を発量が多い拠点、着量が多い拠点到に分類したものである。例えば北海道の場合、12 月に発量の方が多い拠点は 1 拠点であり、12 月に着量の方が多い拠点は 5 拠点あることを示している。この図からもわかるように、中国地方は、12 月、5 月共に、発量の方が多い拠点は 1 つもない。これは、先程の 1、2 で示したように、通信販売会社等の大型倉庫から各家庭への配送が多いことが考えられる。このように近年は、物流拠点の倉庫を管轄内に持ち発量が多い拠点と、住宅街を管轄に持ち、着量が大きい拠点との差がより顕著になってきている。

3 の拠点は特に冬の時期に発量が多く、夏の時期に着量が多いのが特徴である。これらの拠点は、冬に旬果物や海産物などの名産品等が旬を迎える地域を管轄しており、お歳暮のシーズ

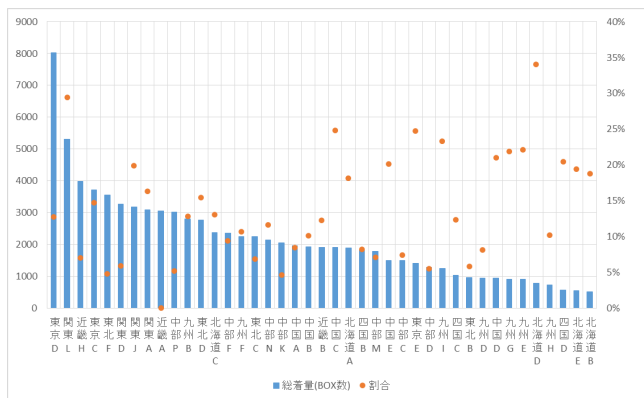


図 3: 総着量と割合 (12 月週平均)

ンに果物の出荷が増えるため、夏には 2 のような特性を持っていた拠点が、冬には 1 のような特性に変化する特性が表れる。

4. おわりに

今回は、12 月と 5 月のデータのみでしか分析を行っていないので、もう少し多くのデータを用いた分析を行いたい。

また、分析結果を用いて、季節変化を考慮したトラックや各物流拠点内での人員配置のスケジューリングを行ってきたい。

参考文献

- [1] 国土交通省, “平成 25 年度宅配便等取扱実績関係資料”, 2014. [Online]. Available : <http://www.mlit.go.jp/common/001047891.pdf>.
- [2] 野村総合研究所, NRI ニュースレター, 2011. 1, Vol. 100, P3 ~P4

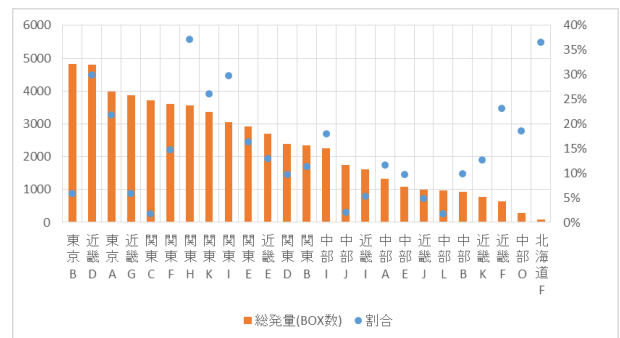


図 4: 総発量と割合 (5 月週平均)

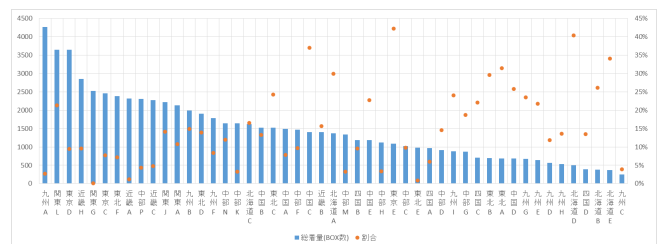


図 5: 総着量と割合 (5 月週平均)

地方	12月(発が多い)	5月(発が多い)	12月(着が多い)	5月(着が多い)
北海道	1	1	5	5
東北	2	0	4	6
関東	8	8	4	4
東京	2	2	3	3
中部	9	7	7	9
近畿	8	7	3	4
中国	0	0	5	5
四国	1	0	3	4
九州	2	0	7	9
総数	33	25	41	49

図 6: 地方毎の拠点の特性